

本會ノ主義目的ハ、別冊ノ通りデスカラ、御賛成ニナルトモ、ナラナイトモ、至急御返事ヲ、承リタウゴザイマス。凡ソ無言ノ人程、始末ニヲヘナイモノハアリマセン。何ヲ話シカケテモ、ウントモ、スントモ、返答シナイデ、居ラレタ日ニハ、手ノ附ケヨウガアリマセン。アノ學生ハ、非常ナ勉強家デ、雨ガ降ラウガ、風ガ吹カウガ、一度モ休ンダ事ハアリマセン。國家ノタメトアレバ、縦ヒ火ニ入ラウト、水ニ飛ビ込マウト、チツトモ、厭ハナイノガ、軍人ノ本領デス。今ノ時勢デハ、英語ナリ、獨逸語ナリ、佛蘭西語ナリ、何デモ構ハナイガ、一二ヶ國ノ語ニ通ジナケレバ、交際上ニモ、學問ノ研究上ニモ、不便デス。

アナタカラ、御話シノアツタ人物ハ、本社デ、採用スルニセヨ(シロ)、シナイニセヨ(シロ)、一應本人ニ會ツテ見マセウ。此ノ品物ハ、善イニシロ(セヨ)、惡イニシロ(セヨ)、實際ニ使ツテ見ナケレバ、御分リニナリマセンカラ、一ツ御タメシナスツテ下サイ。今デハ、大臣ダノ、次官ダノト言ハレル人デモ、一寒書生カラ、出世シタ人ガ、少クアリマセン。アノ學生ハ、何時モ、アレノ、コレノト、苦情ヲ申立テテ、中々面倒ナ男デス。

第二百二十五課

隨ツテニ隨ツテニ連レテニ附ケテニカケテ



人口ガ殖エテ、競争ガ劇シクナレバ、随ツテ知識モ進歩シテ、色々ナ發明ヲ致シマスカラ、物資ノ供給ハ、案ヅル程、不足ニハナリマスマイ。

世ノ中ガ、進歩スルニ随ツテ(連レテ)、總テ物事ハ、輕便ニナツテ參リマスガ、又一方ニハ、益々複雑ニナツテ、行クモノモアリマス。

都會ハ、何カニ附ケテ、便利デス。

朋友ガ、段々出世スルノヲ、見ルニ附ケテモ、自分ノ意氣地ナイノガ、残念デタマラナイ。

アレハ、利益問題ニカケテハ、拔ケ目ノナイ男デス。

學者ハ、世事ニカケテハ、大體疎イモノデス。

### 第二百二十六課 から見ると(から見れば)

に取つては

誰さんは、私と同じ年ですが、私から見ると、餘程若く見えませう。

あの方は、實際の年から見ると、どうしても、七八つ更けて見えます。

今度、私が引つ越さうと、思ふ處は、今の處から見れば、餘程、遠方に、なります。

某君は、今度某官に昇進されましたが、あの方の閱歴や、才幹から見れば、當然といふよりは、寧ろ昇進の方が、遅いのです。



鳥獸の爪や牙は、彼等にとつては、丁度人間の武器の様な者です。

人間にとつて、食物が生命の母とすれば、徳義は生命の父ともいふべき者です。

今日諸君から、斯様な御優遇を蒙りました事は、私の身に取りまして、此の上もない光榮でございます。

第二百二十七課

恐れ入る 恐縮です 憚り  
です 失禮です 失敬です  
濟みません

恐れ入りますが、どうぞ、此處を通して下さい。  
恐縮ですが、ここ暫くの間、御猶豫が、願ひたうございます。

今日は、頓と思ひ違へを致しまして、時間に後れて、相濟みませんでした。

どうも濟みませんが、煙草の火を、一つ貸して下さい。

濟まないが、君、暫く此の包を、持つて居て下さいませんか。  
憚りですが、一寸其の窓を、締め(開けて)下さい。

失禮ですが、一寸御耳を、拜借致したうございます。

失禮ですが、御名前は、何と仰つしやいますか。

途中に寄る處も、ございますから、此處で、失敬(失禮)いたします。

第二百二十八課

御面倒 御邪魔 御手数  
御世話 御厄介 御迷惑



### 御苦勞

奥さん、御面倒ですが、客膳を一つ、拵へて下さいませんか。御邪魔ですが、歸りまで、此の傘を預つて下さい。毎度出まして、御邪魔になりましたが、今度遠方へ引つ越すことに、なりましたから、一寸御暇に出ました。あなたが、御歸省なさるなら、御厄介ですが、私の弟も、一緒に御連れなすつて下さいませんか。御手数ですが、今一度、原文と引合せて、間違ひがないか、見て下さい。色々御手数を、煩はしましたのに、未だ御禮にも参りませんで、相済みません。

明晩は、御一同へ、晚餐を差上げたうございますから、御迷惑でせうが、七時までに御集りを願ひたうございます。御苦勞ですが、明日も御手傳ひ下さることが、出来るなら、誠に好都合でございます。遠方の處を、態々御出で下さいまして、御苦勞様でございます。色々御世話様に相成りまして、誠に有り難うございました。御世話ですが、此の次の會場には、御宅を拜借いたしたうございます。

### 第二百二十九課 氣の毒 御氣の毒様

後になつて、斷るのが、氣の毒ならば、初めから、確信のない



約束は、しない方が、増しです。  
 素氣なく断るのも、氣の毒でしたから、色々事情を打明けて、  
 了解を求めました。  
 毎度頂戴物をいたしましたして、御氣の毒でございます。  
 女中にも、御心付けをいただきました相です。誠に御氣の毒様  
 です。

第三百十課

ニクイ(憎) カネル(兼) グルシ  
 イ(苦) ヅライ(辛)

コレハ、大變書キニクイ字デス。  
 アノ先生ノ處ヘハ、餘リ無沙汰ヲシタカラ、行キニクイデス。  
 コノ靴ハ、拵ヘ方ガ下手ダカラ、穿キニククテイケマセン。

コノ上衣ハ、何處ノ工合カ、着ニククテイケマセン』  
 私ニハ、此ノ本ハ、ムヅカシクテ、讀ミカネマス。  
 黑板ガ白クナツテ、字ガ見エカネマス。  
 此ノ場所デハ、席ガ狭クツテ、四十人ハ、ハヒリカネマス。  
 申シ兼ネマスガ、奥サン、チヨット、着物ノ綻ビヲ、縫ツテ下  
 サイマセンカ』  
 アノ人ハ、辯ガ悪イカラ、演説ノ趣意ハ、ヨクテモ、聞キ苦シ  
 ウゴザイマス。  
 アマリ、世間體ノ見苦シイコトハ、止メ給ヘ。  
 體ニ熱氣ガゴザイマスカラ、熱ツ苦シクテ、叶ヒマセン』  
 此ノ筆ハ、書キヅラクテイケマセン。  
 ソンナ聞キヅライコトヲ、オ言ヒナサルナ。



少々言ヒ辛イデスガ、頼マレマシタカラ、御話シイタシマス。  
膝ニ、腫物ガ出来テ居マスカラ、坐リヅラクテイケマセン。』

第三百三十一課 付ケル(其ノ一) 付ケル

(其ノ二)

アマリ分ラナイ事ヲ言フカラ、キツバリ撥ネツケテヤリマシタ。  
元來道理ノアル不平ハ、威力デ壓ヘツケルコトハ、出来マセン。  
アノ奥サンハ、アマリ下女ヲ責メツケルカラ、一週間ト居ルモ  
ノハ、アリマセン。  
サウ子供ハ叱リツケテモ、言フコトヲ聽クモノデハアリマセン。』  
私ノ宅デハ、料理ハ、何屋カラ取リツケテ居マス。  
私ノ處デハ、洋服ハ、何屋ヘ注文シツケテ居マス。

私ハ、前カラ、新聞ハ、時事新報ヲ、讀ミツケテ居マス。  
私ハ、英語學校ヘ、往クニハ、何時モ、此ノ道ヲ歩キツケテ居  
マス。』

第三百三十二課 入ル 込ム

過分ノ御褒メニ預ツテ、甚ダ痛ミ入りマス。  
甚恐レ入りマスガ、私ノ願ヒヲ、叶ヘテ下サイマセンカ。  
アノ人ノ様ニ、謙遜サレテハ、コチラガ、恥ヂ入ツテ、何トモ、  
口ガ利カレヌヨウニナリマス。』  
僕ハ、折々考ヘ込ム癖ガ、アツテイケマセン。  
アノ人ハ、餘リ迫キ込ンデ、話ヲスルカラ、聞キ取リニクイ。  
アノ人ハ、直グニ自分ノ得意ヘ、人ヲ釣り込ンデ、話ヲスルコ



トガ、上手ダ。』  
何デモ、物事ハ、丁度善イ機會へ、持チ込ンデスレバ、成功シ  
易イ。』

第三百三十三課 立てる 立つ

さう八釜しく騒ぎ立てても、濟んだ事は、取り返しが、附きま  
せん。

あの子供は、親に叱られて、八釜しく泣き立てて居ます。  
人の過を、むごく咎め立てるのは、想ひ遣りが無いのです。  
兎角、人は、自分の事は、棚に上げて、他人の悪い事ばかり、  
『評き立てる弊があります。』  
湯が、煮え立つ。

火が、燃え立つ。

子供が、生ひ立つ。

一度思ひ立つた事は、何處までも、遣りとほさずには、置きま  
せん。』

第三百三十四課 切る 切れる 返る 廻る

此の電車は、買切ですから、外の人は、乗られません。  
今日は、生憎座敷が貸切ですから、御氣の毒様ですが、御斷り  
申します。

僕は、感情が強いから、理性で抑へきる事が、出来ません。  
時間が少ないから、日課の復習が、一々仕きれません。  
今日は、新聞が、賣切れになりました。』



富士山の頂上の金明水は、極、澄み切つた水です。  
今夜の月は、大變冴え切つた月です。  
あれは、眞に落ち着き切つた男です。  
そんな分り切つた理窟を、なぜ小八釜しく、何時迄も議論して居るのですか。』  
湯が、煮えくり返つて居ます。  
月が、冴えかへつて居ります。  
あの御者は、主人の威光を笠に被て、威張り返つて居ます。』  
男の子は、跳ね廻るから、直に靴がきれます。  
そんなに狂ひ廻ると、先生に叱られます。  
餘り飛びまはると、過ちをしますよ。』

第三百三十五課

まる める

あなたの様に、さう性急では、物をはやまります。  
御宅は、奥まつて居ますから、閑靜で結構です。  
地面へ水を撒くと、圓まります。』  
あの博士も、近來大分評判を高めて來ました。  
段々日が長くなつて參りましたから、始業時間を早めて下さい。  
この机の寸法を、少し狭めて下さい。』

第三百三十六課

懸ケル 懸カル 出ス

私ハ、今學校へ出懸ケル處デス。  
授業ハ、今始り懸ケル處デス。



私ハ、昨今獨逸語ヲ學ビカケタバカリデス。

アノ人ハ、何時モ話シヲ仕懸ケテ、途中デ止メテ了フカラ、一

向ニ要領ヲ得マセン。』

役所ノ戻リガケニ、一寸御立寄り下サイ。』

日ガ、今出カカツテ居マス。

屋根瓦ガ、落チカカツテ居マス。

木ガ倒レカカツテ、來マシタ。

此ノ木ハ、枯レカカツテ居マス。』

雨ガ、降り出シテ來マシタ。

子供ガ、本ヲ讀ミ出シタカラ、八釜シクテイケマセン。

アノ人ハ、マタ自分ノ得意談ヲ、話シ出シマシタ。

### 第三百三十七課

メク      メカス

アレハ、一寸才子メイタ男デス。

アスコノ若檀那モ、近頃メツキリ、大人メイテ參リマシタ。

昨今ハ、餘程春メイテ、暖カニ成リマシタ。』

アノ店モ、近頃ハ、當世メカシタ飾リツケヲ、シテ居リマス。

アレハ、始終西洋人メカシタ身ナリヲ、シテ居ルノガ好キデス。

大體ノ意向ハ、ホノメカシテ置イテ下サイ。』

### 第三百三十八課

ガル      ブル(振)      ビル

坊ツチャンハ、大層犬ヲカハユガツテ、一度モ苛メタコトハア  
リマセン。



何君ノ話ハ、活氣ガアツテ、時々滑稽ヲ交ヘマスカラ、誰デモ面白ガツテ聴キマス。

人ヲ訪問シテモ、格別ナ用事ガナイノニ、長居スレバ、却ツテ厭ガラレマス。』

アノ子供ハ、年モ行カナイノニ、大人ブツタコトバカリ、云ツテ居マス。

アノ男ハ、才子ブツテ居ルケレドモ、存外友人カラハ、輕蔑サレテ居ル様デス。

アノ男ハ、馬鹿ニエラブツテ居ルカラ、人ニ好カレマセン。』  
田舎ビタオヂイサング、孫ラシイ子供ヲ連レテ、停車場ノ方へ、

急イデ行キマシタ。  
二十日餘リモ、照リ續キマシタカラ、作物ノ葉ガ、大分乾カラ

ビテ來マシタ。

アノ男ハ、無頓著デ、破レ外套ニ、古ビタ帽子ヲ被ツテ、大道ヲ歩イテ居マス。

第三百三十九課 そこなふ(損) そこねる(損)

私は、今朝六時發の汽車に、そこ乗ねりました。

私は、先刻梯子段から、下りそこなつて、足を怪我しました。

餘り推薦者を信用した爲、つい人を採用しそこなつて、困つて居ます。

第四百十課 合ふ 合せる

今日は、汽車が込み合ひました。



電車で、乗合になりました。  
 子供が、敲き合つて、喧嘩をしました。  
 ステーションの待合室で、出逢ふことに、いたしませう。  
 明日は、何處かで待ち合せて、御一緒に、玉川の方へ、遠足い  
 たしませう。  
 昨日、某さんを訪問したら、丁度某君も來合せて居ました。  
 これは有合せの品で、失禮ですが、臺所用に、御使ひなすつて  
 下さい。

第四百十一課 ぽい(ばい)

近頃は、雨天続きで、室内が濕りつぼくていけません。  
 此の蜜柑は、酸つぼく(ぼくて)、味がありません。

料理は、脂つぼいのもいけないが、水つぼいのは、尙更いけま  
 せん。  
 私は、忘れつぼくて困ります。

第四百十二課 ツキ(付) ブリ(振) アヒ(合)

アンナ、顔ツキヲシテ居テモ、彼ハ中々利口デス。  
 アンナ目ツキデ、睨マレタ日ニハ、誰デモ、フルヘアガツテシ  
 マヒマス。  
 妙ナ手ツキヲシテ、話ヲスル人ガ、アリマスガ、氣障ナ者デス。  
 アレハ、一寸ヅキハ悪イガ、實際ハ、中々親切ナ男デス。  
 アノ人ハ、身振ガイイカラ、顔ノ割合ニ、様子ガ、ヨク見えマ  
 ス。



アノ口振デ見ルト、ドウヤラ、コチラノ希望ヲ、容レテ呉レ相  
デス。

アレハ、近頃、大分、男振ヲアゲマシタ。』

コノ洋服地ハ、大層色合ガ好ウゴザイマス。

又變ナ天氣合ニ、ナリマシタ。

柔術ヤ擊劍ハ、氣合ヲ吞ミ込ムノガ、肝要デス。

第四百十三課

ダラケ

コノ部屋ハ、埃ダラケデス。

私ノ頭ハ、逆上性デスカラ、フケダラケデス。

昨日ハ、又カルミノ中ヲ歩キマシタカラ、靴デモ外套デモ、泥ダ  
ラケニナリマシタ。

第四百十四課

カタ(方)

ガタ(方)

ホウ(方)

私ハ、著物ノ著方ガ下手デスカラ、直ニ悪クシテ仕舞ヒマス。

アノ人ハ、演説ノ仕方ガ、上手デスカラ、聞キ榮エガシマス。

我々が、顯微鏡ヲ覗イテモ、見方ヲ知ラナイカラ、微菌ガ少シ  
モ見エマセン。』

櫻ノ花ガ、六七分方、咲キマシタ。

今晚ノ月蝕ハ、八九分方、虧ケマス。』

梅モ、モウ、散リ方ニ、ナツテ來マシタ。

モウ、今日モ、夕方ニナリマシタ。

某サンハ、今シ方、歸ツタバカリデス。』

アノ人ハ、ドチラカト言ヘバ、少シ丸顔ノ方デス。



アノ婦人ハ、可成り背丈ノ高い方デス。  
コノ方ヨリ、アノ方ハ、品ガ少シ上等ニナリマス。  
私ヨリ、アナタノ方が、三ツ四ツ年ガ若ウゴザイマス。」

第四百四十五課 ガチ(勝)

粗忽ハ、誰シモ有リ勝デス。

此ノ頃ハ、イツモ出ガチデスカラ、御出デ下スツテモ、失禮バ  
カリ、イタシテ居リマス。

追々、寒クナツテ、參リマシタカラ、兎角、風ヲ引キガチデス。

第四百四十六課 目

こんな憂き目を見るよりか、いつそ、死んだ方が増しです。

誰でも、一度は辛い目を見なければ、眞の経験が、積まれない  
のです。

人は、年中苦しい目ばかり見て居ると、元氣がなくなつてしま  
ひます。

私は、先日途中で、酔つばらひに出つ會して、酷い目に遭ひま  
した。

此の薬は、どう云ふものか、一向利き目が見えませんが。」

私は、今度仕合せに、三番目で、及第いたしました。

私は、丁度今年で、東京へ来てから、五年目になります。

あなたの繻帯は、是から五日目五日目に、巻き替へませう。

御尋ねの御宅は、私の處から、五軒目です。



### 第四百四十七課 手

手嚴シク、談判スル。

手暴ク、持チ扱フ。

手酷ク、取り扱フ。

手篤ク、待遇スル。

御手篤ナ御モテナシヲ、蒙リマシテ、誠ニアリガタウゴザイマ  
ス。

手短ニ、謝辭ヲ述ベル。

食卓ノ演説ハ、手短ナノガ、一番受ケガ宜シイ。

アノ醫者ハ、私ノ病氣ヲ、手輕ク言ヒマシタ。

アスコニ、御手輕御料理トアルカラ、テヨツト、晝食ヲ遣リマ

セウ。

些細ナ病氣デモ、始メニ養生ヲシナイト、忽チ手重クシテシマ

ヒマス。

談判ノ仕方ガ、手ヌルイ。

ソナナ手緩イ遣り方デハ、到底急ナ間ニ合ハナイ。

一寸シタ事カラ、手違ニナツタ。

飛ンダ手違ガ、出來マシタ。

手配ガ、十分ニ届イテ居ラント、其ノ時ニナツテ、マゴツキマ  
ス。

年寄ヤ子供ハ、手柔カニ、アシラツテ遣ラネバイケナイ。

アノ人ハ、手堅イカラ、何ヲ任セテモ、安心ダ。

アレハ、相手ニシテモ、サツバリ手答が無イカラ、面白クナイ。



アノ男ナラ、少々手答ガアル。  
僕モ、アノ始末ニハ、實ニ手コズツタ。  
チツト手コズラシテ遣ラナイト、直ニ慢心シテイケナイ。  
アノ男ハ、手蔓ガイイカラ、非常ニ早ク昇進シタ。  
官吏ハ、手引キヲスル者ガナケレバ、急ナ出世ハ出來ン。  
アナタノ御手際ニハ、實ニ感心シマシタ。  
此ノ晝ハ、餘リ不手際デスカラ、御目ニカケラレマセン。

第四百四十八課 とり(取)

忙しいのに、取紛れまして、意外な御無音を、いたしました。  
御取込の處へ、出まして、大層御邪魔を、申しました。  
あの寄宿舎は、取締が大層好くなりました。

そんな不取締な事をすると、外部から、忽ち非難を受けます。  
甚取散して居つて、失禮ですが、書齋へ御出で下さい。  
餘り取散して置くから、何か捜す時に、忽ち差支へます。  
不慮の災難で、餘り吃驚したものですから、老人は氣を取亂し  
て仕舞ひました。  
餘り小心な者は、ちよつとした事に出會つても、直に取逆上せ  
ていけません。  
店を取擴げる。  
證書を取換はす。  
契約書を、取換はす。  
此の品は、少々工合が悪いから、外のと取換へて下さい。  
何さんが、餘り無責任な事を、言つた者だから、私が、後を取



繕ふのに、餘程骨が折れました。

よく取糺して見ねば、事實の真相が、分りません。

あの人は、精神が錯亂して、近頃は、ちつとも取留めもない事ばかり、言つて居る。

私は、昨日、誰かに傘を取違へて、持つて行かれました。

場馴れない者が、演説をすると、大事な事を、取落していきません。

あなた、そんなに力を落してしまつては、何事も出来ませんか、元氣を取直さんければ、いけません。

御注文の品は、明朝までに、すつかり取揃へて置きますから、一寸御使をよこして下さい。

何か一つ事があると、忽ち種々の取沙汰が、傳はる者です。

餘り輕卒に、世間の取沙汰を信用しますと、飛んだ失敗を招きます。

今から、仕事に取懸ります。

物事は、總べて、取つ懸りが、大事です。

此の事は、此の町内の取極めですから、守つて戴かねばなりません。

昨日、何新聞に出て居つた何々の事は、今日、取消が、出て居ります。

あなたは、兎角、取越苦勞を、なさる癖があつて、御損です。

### 第四百十九課 サシ(差)

餘り珍ラシクモアリマセンが、此ノオモチヤヲ、坊チヤンニ差



上ゲテ下サイ。

御荷物ハ、昨日何丸ニ積込ンデ、差立テマシタ。

此ノ頃、差送リマシタ爲替入ノ書狀ハ、モハヤ、御手許へ、着

キマシタラウカ。

御注文ノ御品ハ、今日悉皆取揃ヘマシテ、小包郵便デ、差出シ

マシタカラ、然ルベク御承知ヲ願ヒマス。

今日ハ、差支ガアリマスカラ、缺席イタシマス。

御差支ガナケレバ、緩ツクリ御遊ビ下サイ。

今晚ハ、是非御差繰リナスツテ、御出席ヲ願ヒマス。

時間ノ差繰リガ、ドウニカ就キマシタラ、必ズ出席イタシマス。

我々ノ經濟ハ、収入カラ、支出ヲ差引クト、幾ラモ、餘ル者ハ、

アリマセン

差當リ、困ルコトモ、アリマセン。

差向キ、代理デ間ニ合セテ居マス。

差詰メ、急ヲ要スルコト丈ハ、モウ遣ツテシマヒマシタ。

### 第百五十課 ヒキ(引)

御互ニ、精神ヲ引締メテ居ナケレバ、放埒ニナツテイケマセン。

近頃ハ、經濟ガ膨脹スルバカリダカラ、少シ引締メナイト、生

計ガ立チ行キマセン。

金融ガ緩ンデ來タカラ、昨今ハ、各銀行トモ、一般ニ、利子ヲ

引下ゲテ來マシタ。

家屋稅ガ、高クナツタカラ、家主トモガ、イイ言ヒ草ニシテ、

無闇ニ、家賃ヲ引上ゲマシタ。



此ノ事件ハ、悉皆アナタへ御引渡し申シマシタカラ、是デ私ハ責任解除ニ成リマシタ。

前任幹事カラ、新任幹事へ、モハヤ事務ノ引継ヲ、濟シマシタ。コノ者ノ身ノ上ニ、附キマシテハ、私ガ一切引請ケマシテ、決シテ、アナタニ御迷惑ヲ掛ケマセンカラ、御安心下サイ。男子ハ、一旦引受ケタ事ハ、タトヒドンナ事情ガアツテモ、決シテ、中止スルモノデハアリマセン。

近頃ハ、物價ガ高クナツテ參リマシタカラ、下宿屋ナドモ、是迄ノ賄料デハ、引合ハナクナツタ相デス。

アノ店ハ、少シ高い様ダカラ、一二個處、他ノ店へモ、引合ツテ見ナサイ。

ドチラノ辭書ガ宜シイカ、兩方引合セテ見レバ、分リマス。

此ノ方ハ、今度新任ニナツタ何先生デスカラ、一寸諸君ニ、御引合セ申シマス。

ソナ埒モナイ事ヲ言フナラ、斷然引撥ネルガ、イイヂヤナイカ。

何ノ嫌疑者ダカ、巡查ガ大勢引ツ括ツテ連レテ行キマス。

全體ヲ引ツ括メテ、考ヘナケレバ、一部分ダケデハ、適當ナ判斷ガ、與ヘラレマセン。

猫ニ、頭ヲ引ツ抓カレタ。

### 第百五十一課 持て

何でも、珍らしい中は、世間にもて囃されます。

日本でも、維新の當時などに、歐文の少し讀めた者は、非常に



もて囃されたものです。

私は、子供の多いので、持て餘して居ます。

あの男は、實に持て餘し者だ。

某さんも、彼の一件では、全く持て扱つて居ました。

某さんも、あの息子さんの放埒には、すつかり、もて扱つて居た様子です。

此の硯は、老人が、もて馴らした者ですから、形見に、あなたへ差上げます。

### 第二百五十二課 たち(立)

今の政黨者流の中では、何さんは、ずつと等輩に立優つた人物です。

相手の技倆が、餘り立後れて居るから、見て居る張り合ひがありません。

そんな事には、立入らないが宜しい。

餘り立入り過ぎると、却つて面倒を惹き起します。

立入つて御伺ひ申す様ですが、全體、あなたの御料簡を、包ま

ず御話し下さる譯には、行きませんか。

### 第二百五十三課 あひ(相)

相變らず、御機嫌よう、いらつしやいますか。

以後左様な不都合な事は、決して相成らんから、左様に心得る。相成るべく、差し繰つて、出席いたしませう。』



あなたは、相手が一向働けない人だから、御骨が折れます。相棒が悪いから、どうも、話しが、しにくくていけません。今晚は、御客が込み合ひましたから、甚恐れ入りますが、どうか、御一名様、相宿に願ひたうございます。世は相持ちですから、御互に助け合はなければなりません。相對で、交際する者ばかりだと、心易くて宜しいが、身分の懸け隔つた人が、まじつて居ると、どうも窮屈でいけない。

第百五十四課 フリ(振)

只今、爲替ヲ振出シタバカリデス。  
此ノ手形ノ振出人ハ、誰デスカ。  
某銀行ニ、金ヲ振込ンデ置ケバ、大抵ノ都會デ、受取ルコトガ、

出來マス。

何日マデニ、本金ヲ振込マナケレバ、申込ガ、無効ニナリマス。  
唯今、一寸後ヲ振向イタ拍子ニ、紙入ヲ掏ラレマシタ。  
アノ人ニハ、私ノ呼ブノガ、聽エナイデセウカ、振向キモシナイデ、行ツテシマヒマシタ。  
過ギ去ツタ後ヲ、振返ツテ見レバ、丸デ夢ノ様ナモノデス。  
樵夫ガ、斧ヲ振上ゲテ、樹ヲ切ツテ居マス。  
五十人ヲ、兩方ニフリ分ケテ、綱曳ヲシマス。  
昔ハ、男女トモ、小サイ時ニハ、髮ヲ左右ニ分ケテ、結ヒマシタ。

第百五十五課 クリ(繰)



アノ邊一體ハ、水源保護林ニ、繰込マレマシタ。  
進軍喇叭ト共ニ、繰出ス兵士ノ勇シイノニハ、何時モナガラ、  
心強ク感ジマス。

初カラ、モウ一度、繰返シテオ讀ミナサイ。

歴史ハ、繰返ス」ト云フ諺ガアリマス。」

明日ハ、外ニ差支ヘガアリマスカラ、他ノ日ト繰換ヘテ下サイ  
數學ノ時間ヲ、午前ニ繰上ゲテ、博物ヲ、午後ニ繰下ゲレバ、

丁度都合ガヨウゴザイマセウ。

前年度ノ繰越高ハ、皆デ幾何ニナリマスカ。

萬障御繰合セノ上、御出席ヲ願ヒマス。

商人ハ、一旦信用ガナクナレバ、總テノ繰廻シガ、出來ンヨウ  
ニナリマス。

### 第百五十六課

イキ ユキ(行)

是迄ノ行懸リ上、急ニ手ヲ引ク事モ出來マセン。

前々カラノ行キガカリモアリマスカラ、アノ一件ハ、當分私ニ  
任セテ下サイ。

諸會社ノ外資談モ、案外纏ラズニ、行惱ンデ居ル様子デス。

アンナ無方針ナ遣リ方ヲ爲レバ、行詰ルノガ當然デス。

アノ男ハ、萬事ニ拔ケ目ナク、行届イタ人デス。

諸君ノ御推薦ニ由ツテ、會長ノ任ヲ、御請ケイタシマシタガ、  
不行届キノ點ハ、何分御指導ヲ願ヒマス。

宣傳ガ行渡ラナイカラ、本社ノ存在ハ、マダ餘リ廣ク世間ニ認  
メラレテ居ナイ様ダ。



試験用紙ハ、ミンナニ行キ渡リマシタカ。

此ノ間ハ、チヨツトシタ行違ヒデ、飛ンダ御迷惑ヲ掛ケテ、相  
濟ミマセンデシタ。

唯今、アナタノ處へ、使ヲ出シマシタガ、途中デ行違ヒニ成ツ  
タデセウ。

### 第百五十七課 物の(物)

あの人は、昔氣質で、物堅い一方です。

餘り物堅い一方で、融通の利かん人も、始末にをへないもので  
す。

物柔かに、話し込まれると、誰でも無理に斷ることが、出來な  
くなります。

あの人の物言ひ振りは、おつに澄まして居りますが、能く付き  
合つて見ると、中々打ち解けた愉快な人です。

宴會の時は、理窟を抜きにして、四方山の物語りをするのが、  
よろしいのです。

子供は、母の懷に抱かれながら、御伽話や勇士の物語りを、喜ん  
で聞くものです。

年寄は、物参りに出るのを、一番の楽しみにして居ります。

ひどく瘦せこけた病人に、ニヤリと笑ひ顔を見せられるのは、  
誠に物凄いです。

不斷、不用な荷物は、物置きへ入れて下さい。

私の宅は、地盤が高いから、物干しへ上つて見れば、随分遠方  
まで見晴らします。



東京の人は、物見高いから、自轉車が電車に衝突した位の事にも、直ぐ、彌次馬が集ります。

年寄や子供は、物見見物に出るのが、何より娛しみです。

近頃は、雑務が餘り忙しい所爲か、物忘れをして困ります。

誰でも、子供の時には、物覚えがよいものです。

折角莫大な金と時間を掛けても、學校を卒業しなければ、世間の物笑ひになるばかりです。

落語家の某は、物眞似が上手なので、評判です。

どんな物忌み祈禱をしても、醫者にかけなければ、病は直りません。

近頃、私は便利な處に住んで居る丈、是迄よりも、ずつと物入りが嵩んで來ました。

物好きにも色々ありますが、園藝や音樂などに凝るのは、先づ

品の好い方です。

私は、何の物心も知らぬ幼い時に、母を喪ひました。

同じ事でも、物識り顔に話すと、人に悪感を抱かせます。

維新以來、智識を重んじた結果、物識りは大分多くなりましたが、まだ萬世の師表となる様な高德の學者が、出て來ないのは、遺憾です。



改訂 日本語教科書終

明治三十九年六月一日 日印  
明治三十九年六月五日 日發  
昭和二年二月二十五日改訂九版發行  
昭和十年九月二十五日改訂十三版印刷  
昭和十年十月一日 日改訂十三版發行

日本語教科書奥附

正價金壹圓四拾錢

編輯者 宏 文 學 院

代表者兼 發行 者 松 本 龜 次 郎

東京市杉並區阿佐ヶ谷五丁目七十六

印刷者 笹 川 欽 藏

東京市本郷區眞砂町三十六



發行所

東京市杉並區阿佐ヶ谷五丁目七十六番地

有

隣 書 屋

振替口座東京三三七三九番



北平大學文科學院 長胡

適博士題辭

大阪外國語學校

井上翠教授題辭

帝室博物館總長

東亞高等豫備學校學監 杉榮三郎博士題歌

鶴

峯松本龜次郎著

# 譯解 日語肯綮大全

第三版 菊判總頁數四六〇頁  
定價貳圓五拾錢

本書網羅關於日語學上之須知要訣、與緊切用語、雅俗並舉粗細無遺。分爲五篇。第一篇爲假名與音韻。音韻中、學者每苦於發音者、則多設課目以資練習。第二篇爲語法應用會話。乃爲此書本幹。寓必要之語法於日用會話中、以期理論與應用並行而無偏倚。第三篇爲口語文法大綱。全篇用問答式、直截簡明說述品詞之意義用法及文章概論。學者先熟讀此篇、然後繙讀高深文典、尤爲易曉。第四篇爲文語用例一斑。所謂現代文者、大都屬於口語與文語之混合體。故學者若不學文語之一斑、則難免面牆興歎。本篇乃補其缺憾者。第五篇爲外來之新語與時事文。方今因東西文化接近、外國語流入於我邦者、日多於一日。苟怠其研究、則不免爲時代之落伍者。本書特選錄最近流行者八十餘言與時事文、以喚起學者之注意耳。此外另添口語與文語之活用言及助詞全圖二表。其中關於助動詞及助詞、特附譯語以便初學者。著者研究日語及其教授法、於茲有年。此書乃爲其近著。學者倘熟讀之、自得窺日語之全豹矣、異日隨手繙他書、其如指諸掌而已乎。

發行所

東京市杉並區阿佐ヶ谷五ノ七六

有隣書屋



松本龜次郎著

### 言文對照 漢譯日本文典

第三十七版

菊判總頁數四六〇頁

定價貳圓五拾錢

此書為漢譯日本文典之嚆矢。言文對照、舉例示證。所附漢譯、極為明瞭。是以往歲出版之後、中華人士學日本文者、莫不人手一冊、視為津梁。不意遭癸亥震火、燒失紙型。故特將原稿、從新訂正、再出新版。舉凡原稿中、舉例之不適切、解說之不中肯綮者、莫不徵之於教授之經驗、加以修正、俾學者容易理解。凡研究日本文者、倘能一閱此書、則必能詳悉日本文語文法之法則、兼曉日本口語文法之大綱也。

發行所

上海文路八十二號

日本堂

松本龜次郎著

### 漢譯 日本口語文法教科書

第十二版

菊判總頁數三八四頁

定價貳圓

此書為言文對照漢譯日本文典之姊妹篇。唯前書以文語文法為主、以口語文法為從。故對於口語法則、自不免有語焉而未詳者。此書則就口語法則、詳加解說。全書分為音韻文字品詞各論、一一舉例、說其法則、且施以漢譯、而易於理解。本書置重於教授之實際、不拘泥於文法上之理論、要在整頓複雜多岐之語法而使之入於正軌。坊間所囑口語文法課本、多屬文語文法之翻案、至於口語特有之接頭語、接尾語及副詞、接續詞等之意義用法、曾無說及者。然外國人學日語時、所最感困難者、即在此等特別諸詞。本書特用力於此、丁寧舉例、詳細解說、道前人之所未道。初學日語者、倘能細讀此書、兼閱言文對照文典、而後研究各種書籍、自不難迎刃而解矣。

發行所

東京市神田區西神田町一丁目一三

笹川書店

### 特 白

松本龜次郎著

### 漢譯 日本口語文法教科書

普及版

菊判總頁數三八四頁

定價壹圓

掛號送費金拾八錢

普及版發行宗旨

從前外國人之研究日語者、不過官紳學生中一部分。近因日本文化有長足之進步、占優勝之地位於世界列強間、研究日本及日語者之範圍、至於無分職業階級、旺盛極矣。於是本書著者亦隨大方勸說、充大眾希望、贊成於普及版之發行。蓋以普及版之所異于上製本者、唯在裝釘之簡素與紙質之稍劣耳。至其實質內容、則二者全然相同。而價錢不及其半。故為經濟計、則捨華而取實可也。然美本者於實用以外、覺展讀之際、又多快感。故仍為不可少之書。要在學者視其經濟力之如何、而定其取捨耳。

### 發行所

東京市神田區西神田一丁目一三

笹川書店

北平 東單牌樓北路西

東亞公司



松本龜次郎著

漢譯 日本語會話教科書

附言文漢譯書簡文語用例

第四十版 袖珍本總頁數三五六頁 定價壹圓五拾錢

本書置重於應用。其宗旨、在俾初學者熟練日用會話。分爲五十課。乃自講堂客舍、四季朝夕、遊步訪問、介紹拜年、問道乘車、買書購貨、做衣修錶、剪髮照相、迎醫探病、租房訴訟、以及各種應用之練習問題、無不完備。學者倘袖一本、隨時誦讀、則於會話一門、當覺甚易而不知難矣。卷末附以書簡文語用例、書簡文原有特別用語。例如、候、致、仕、度、可、間敷、間、處、付、條、儘、由、趣、程、段、拜啓、陳者、敬具、不宜等。又有特別儀禮。例如起首、時候、起居、本文、餘情、收結等之諸法則。本書一々舉例、言文對照、且附以漢譯。學者若熟讀此篇、不但可與日人應酬尺牘、且能交換智識、敦睦友誼也。

發行所

東京市神田區三崎町二丁目三〇

光榮館

松本龜次郎刪修

改訂 日本語教科書

第三十版 菊判總頁數二四〇頁 定價壹圓四拾錢

此書係專爲純粹之學校用日語課本編述者。故唯有本文。不再附假名漢譯。蓋因學校內自有熟練日華兩國語之教師。對於假名華譯、隨時口授、奏效反較爲便捷也。卷首揭字母音韻、漸進於會話式、授以日常必須之用語與基礎的語法、以期培養日語之根柢、所謂基礎的日語課本也。

發行所

東京市神田區今川小路二ノ一一

金港堂

汪榮寶先生題字 王 一 亭先生題畫并題簽  
杉榮三郎博士題歌 松本龜次郎著

中華 五十日遊記

附中華留學生教育小史 中華教育視察紀要

四六判總頁數五三〇頁 插入風景相片壹百 定價貳圓

昭和五年首夏、著者爲攷察民國教育起見、南游上海杭州蘇州南京九江廬山漢口武昌、後順流而下、由滬航海、經青嶋旅大、溯白河至天津、淹留北平、探萬壽山碧雲寺香山勝、登攀八達嶺、由京奉鐵路、經山海關、到奉天、視北陵撫順、更北進至哈爾賓、然後旋踵入朝鮮、渡鴨綠江、過平壤、望牡丹臺、經京城釜山、所謂南船北馬五十餘日、始歸抵故山。其間與日華人士、語舊談新、或跋涉名山大川、或縱覽平原曠野、或探尋勝跡名都、乘興記錄、不一而足、乃爲本篇遊記、以供同好。其攷察學校者、則別編爲中華教育視察紀要。可以觀在黎明期民國教育界之指導精神與其實績矣。至于中華留學生教育小史、曾應日華學會之需用、而登載於日華學報者。雖未及完全錄載、但關於四十年來留學生教育之沿革、則莫詳於此書。著者關於東亞之國際現狀、矧々獨憂者、本書亦寫其片鱗。憂世之士、幸賜一閱焉。

發行所

東京市神田區西神田二丁目二ノ六

東亞書房



以上各書中外發賣所並經售所

神田	神田	神田	神田	神田	神田	神田	神田	神田	神田
三省	東京	笹川	富山	巖松	光榮	東亞	大阪屋	北隆	文求
堂	堂	店	房	堂	館	房	書店	館	堂
上海	上海	北平	漢口	青嶋	新京	大連	熱河	哈爾濱	
文路八十二號	北四川路	東單牌樓	日租界	中山路	東一條通 (春明書莊)	奉天順天	承德	地段街	
日本	內山	東亞	思明	博文	巖松	大阪屋	東亞	千葉	
堂	書店	公司	堂書房	堂書店	堂支店	號書店	公司支店	書店	

東京市杉並區阿佐ヶ谷五丁目七六  
振替口座東京三三七三九番

有隣書屋 敬啓



689  
10



